

針葉樹会報

復刊第31号



目次

花の十文字峠 中川 孫一……一

夏山懇親山行始末記 久保孝一郎……三

夏の黒部東沢 高橋 信成
三森 茂充……五

中村 雅明

エベレストをこの眼で見る

吉沢 一郎……十

会務報告 大賀 二郎……十一

編集後記……十二

花の十文字峠

中川 孫一

序

花の命は短くて、見頃のタイミングがむづかしい。今までに何度か失敗があった。富士山五合目のしゃくなげは筆の穂

先のように固かったし、阿武隈山地の高萩に近い花園神社のしゃくなげの大木は

「今年はウラ年で花が少ないでしょう」と社務所から返事が来たし、長野の近くのおんずの里の屋代駅長からは「この十日頃が見頃です」という案内状にいられて勢いこんで出かけると、全部蕾だったし、掛川のそばの可睡斎のぼたんは、花を切りとった直後だったり、苦い思い出だけが残っている。

秩父の主の柿原から「しゃくなげは良い季節と存じます。但し本年は全般的にひたしや、味噌汁を作ってくれて、楽しい中食になった。

おくれ気味とは存じますが」という返事が来ていられるもの、同行の山田からは、カラ松の深緑が雨にけむる戦場原の開

「六月十二、十三の日程しかとれない」といってきているので、入梅直後の、なる。古い良く踏まれた峠道は、高度をあ

んとも不安な空模様だが、二人共天気男 げるにつれて秩父特有のコメ梅の小暗い

だから、何とか晴れるかもしれない、原生林をぬってゆく。

文字通りの空頼みを、宿願の十文字峠の 「八丁坂は滑るでしょう」と白木屋の娘

しゃくなげ見物にかけて、アルプス1号 さんは心配してくれたが、小雨なので、

の客となった。 それはほどのこともない。上り切ったところ

雨になった。梓山の白木屋でバスを降り と山田の指さす方に、コメ梅の原生林の

頃、明るくなったので「もう少し先の 樹間を透して鮮かな赤紫色の塊が見え、

河原で中食にしましょう」という山田を 近づいてみると、満開のミツバツツジの

制して「屋根のあるところで食べよう」 高い枝だった。トラバース道を五、六分

と白木屋の新築の二階に通った。去年の 進んだ頃、右下手に満開のしゃくなげの

暮から正月へかけて滞在した山田を憶え 群落を見る。やがて原始林のややうすく

ていて、山菜（つりがねにんじん）のお なった平地に小屋が現われ、近づくにつ

れて、小屋のまわりには、移植したらしいしゃくなげが美しく咲き乱れていた。

大群落めぐり

小屋は若い女の子が一杯だった。(泊客二十七人中十四、五人が女性、外のキャンプに六人連) ウーマンリブの山岳版だろうか。

しゃくなげを見に登ってきたと告げると、花好の小屋番(小屋のまわりのしゃ

くなげは彼の植えたものだった)は「この裏山が今満開で、こんなに良く咲いたのを、この二、三年見たことがない。案内しましょう」

埼玉国体で開通したという原生林中の「かもしか新道」を一〇〇メートルほど行ってから、左手の小高い丘に立って、彼の指さす方に目をやると、息をのむような、すばらしい大満開が原生林間に展開した。

生が写真をとりに見えましたのでご案内しました」傘を放りだして、カメラを構える。見渡すかぎりの大群落は数百株もあるうか。咲き初めにピンクの光沢。

蛇足

雨に濡れた花びら。ぼたんのような大きい花頭。「旧小屋のそばのは盛りを過ぎて白っぽくなつたよ」今までに見てきたしゃくなげは、通りすがりの道端に咲いたものばかりだった。このような大群落の中を泳ぐようにして鑑賞したのは初めてである。

十文字峠越は、ガイドブックにある通り、栃本が起点になっている。里程標の一里観音が栃本に近いことから見ても、秩父から信州への往還(甲州街道、中仙道のバイパスに当り、栃本に関所があった)が本命であった。

ここは地形でいうと、東沢の支流の源頭に当る。登山道(かもしか新道)からは全く見えない。峠小屋新設以前(四二年前)は全く知られていない秘境で、小屋開設後初めての大満開にめぐり合わせたのは幸運の一語につきる。

しかし、小海線の開通した今日では、起点を信州側にとれば梓山が一三〇〇メートルであるから、秩父側の栃本の八〇〇メートルにくらべて、コースの難易は説明するまでもあるまい。これを行程時間で示せば、信州コースは三時間半、秩父コースは八時間である。

カラーの出来がよかったら、秩父鉄道のポスターか、パンフレット用に贈ろうと思っっている。

翌朝早く、かもしか新道を五葉(松)

先週の土曜(五日)、清水(武甲)先

展望台まで行ったが、この道端の花も美

あし・信濃川上梓山のバスは早朝から十本も運行され、梓山発の終車は六時までである。峠小屋にバス時刻表がある。栃本部落の車道は十文字峠入口まで通じてい

る。三峰口か、二瀬のバス終点からタクシーで行くとよい。柳小屋（股ノ沢）ルートをとるなら、川又までタクシーで行ける。



夏山懇親山行

始末記

久保孝一郎

六月の総会の席で山本健一郎君が週日山行ができそうだとの話なので、七月に何処かと考えていたら、一ノ沢から常念に登り一ノ沢に下って上高地へ出るコー

スを思い立った。

昔の冬山上高地入りのコースで、加藤文太郎の記録をみると年により最後のつめの沢のルートは色々とられているようで、今の僕の体力気力で果して積雪期に登れるかどうか疑問だが、この程度を目標にしてよさそうに思うから、夏山でじっくり地形を偵察しておくのも悪くない。それに常念は松本から眺めて立派な山容で、とりつきも比較的便利で、いつでも行かれると思いつきながら、登り残している山である。今年の夏はいつも懇親山行を企画実行してくれた山田が体調により自重することなので、これをもって今年の夏山企画として、なるべく多数の方に参加してもらおうと、大賀幹事長・中村山行企画幹事に諒解をとりつけ、懇親山行常連と一部地方会員に通知を出したのは七月下旬であった。

僕は商売がら土・日曜をかけた。山もまた空いているので八月十日発とし、土・日曜をかけた、会社勤めの方の便利

な、八月二十日発（責任者中村）の二回に分けて企画した次第でしたが、その反省をみると第一回参加者なし、第二回は中川さん柿原さんが行けそうなので、八月十二日中川さんと丹沢葛葉沢でトレーニングして、僕はこれにそなえた。ところが、その後、中川さんは都合悪くなり、僕は柿原さんのおともができる。と楽しみにしていたが、同氏からも「参加者少くは懇親山行の意義なし」と断られてしまった。かくなるうえは、単独行で足のむくま気のみくまま何処かを放浪しようとして八月二十四日朝一番の急行で新宿を発った。なるべくは初志を貫徹して前記コースを歩きたく、一応切符は豊科まで買ってあるが、この時間では常念は中途半端である。やはり夜行に乗って常念小屋まで頑張るか、この時間なればコッヘルぐらい持参して一ノ沢無人小屋で夏のことゆえ、着のみ着まま眠って行く手もあるのだが、自炊も億劫と、その用意もしてこなかっ

た。要するに気ままにワンデルングして、形説明をしてもらいながら白馬大池駅まで下りてきた。駅付近の農家の部落は過疎化進行中で安い売り物があるせいで、出物があつたら連絡してくれと運転手に頼んでおいた。駅付近の里山と川と駅舎や道路のたたずまいが故郷喪失者の僕には何となく懐しい風景に眺められたからである。

と企画連絡通知が急であつたことが第一、今後会報を定期的に必ず発行し、これに早めに予告したい（九月三日評議員で決議事項）

僕の貧弱な山行経歴には入っていない白馬岳へ行くことにした。平凡な一般コースながら五十才を過ぎた僕のリクリエーション登山には結果的に最適であつた。

〔付記〕

①記録 第一日 白馬駅ータクシーで猿

倉・これより歩き白馬尻小舎泊

白馬尻の小舎で沢水に冷したビールを雪溪を渡ってくる冷風に吹かれながら飲んだ時は体の内外とも冷えて寒いくらいの暑気払いであつた。山は最盛期が過ぎて適度の静けさと賑かさがあつて、適当な同行者にも恵まれれば、また白馬乗鞍岳から天狗原の間は単独行もしてきた。梅池小屋を下るとすぐ出来たての立派な自動車乗り入れの林道が出来ていて驚いた。そして間もなく帰りのタクシーをキャッチしてきて、地元

第二日 大雪溪を過ぎ白馬岳頂上を経て白馬大池小舎泊

第三日 白馬乗鞍岳を経て天狗原を通り梅池小舎・少し下ると前記自動車乗り可能の林道（年内に小舎まで通じるだろう）が始まる。タクシーで白馬大池駅

池小屋を下るとすぐ出来たての立派な自動車乗り入れの林道が出来ていて驚いた。そして間もなく帰りのタクシーをキャッチしてきて、地元

の運転手にスキー場の地

②夏山懇親山行が流れた原因を反省する

沢 東 部 黒 の 夏

メンバー

成 充 明	信 茂 雅	橋 森 村	高 三 中
-------	-------	-------	-------

東沢から西銀座へ

黒部川の思い出はいくつかあるが今回の山行で、黒部川についての思い出をさらに豊かにできたことで大いに満足している。

八月二十日(金)

新宿発

中村と二人で新宿から夜行にのる。久

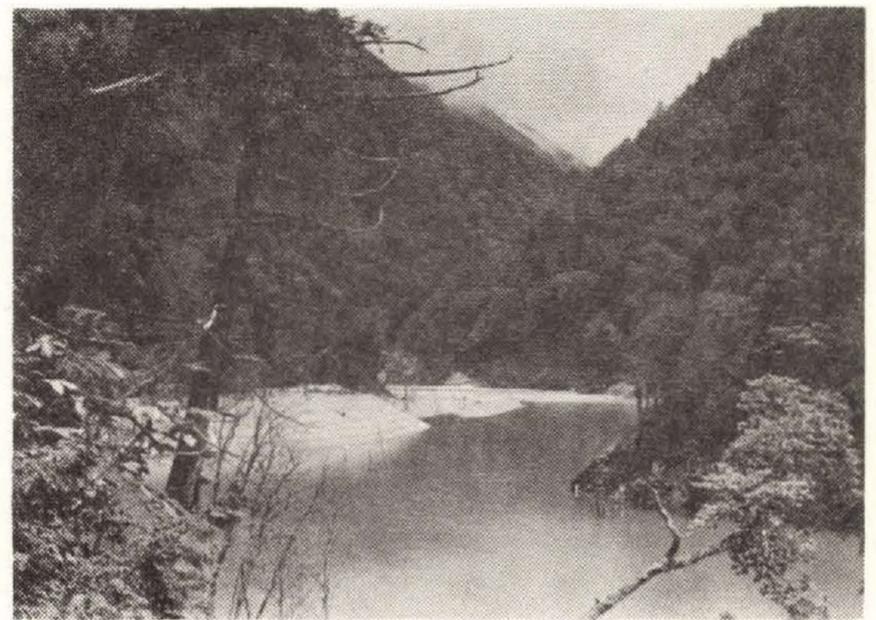
しぶりの山行であるのでなんとなく楽しい気持であった。十一時三〇分発であったがお盆を過ぎたせい、それほどこんでいない。のった人は全員すわれたようである。

八月二十一日(土)

大町——扇沢——黒四ダム——平ノ小屋——奥黒部ヒュッテ(泊)

三森は数日前から妻子をつれて白馬山麓の民宿にいていて、われわれ二人が大町につくと民宿の車で駅まできていた。

おかげで扇沢までその車で送ってもらい時間的に大分たすかった。トロリーバスでトンネルをぬけダムまでいく。トンネルを出ると外は雨が降っていた。無料休憩所で朝食をとり雨具をつけた。平ノ小屋までは歩かなくてはならないが遊覧船があるいは平の渡までいっているかも知れないというあわい希望をもってダムに向う側の遊覧船の事務所まで歩く。ここでいきいてみると平の渡し近くまでいくけ



黒部湖

れど降りることはできないという。コースタイルで五時間のところを平の渡しまで歩かなくてはならぬ。しょぼしょぼとふる雨の中を久しぶりにつくぐキスリングを背に進む。黒部湖にそったこの道は晴れていれはもっと楽しいものである。十一時ごろ平の渡しにつく。何時に船が出るのか心配であったが九時二十分と十二時と四時の一日三本であった。約一時間小屋の前でのんびりと昼食をとった。

昔、合宿で五色から針ノ木までいったと

八月二十二日(日)

ヒュッテ——東沢——雲の平(泊)

きのことが思い出される。あのときはつ

六時にヒュッテを出る。もう明るい。

り橋を渡って黒部川を越したが今は船で

小屋の前で写真をとって出発する。出る

湖を渡ることになる。渡る人はわれわれ

とき小屋の人からいわれた。

三人しかない。十二時近くなったので船

「ガスで水晶と赤牛の間を東沢乗越と

つき場にいくと、向うから小さな船がや

まちがえてのぼってしまった人がいるか

って来た。つくと数人の人が降りてきた。

ら注意するように。」

関西電力の関係者であるらしくダムから

小屋を出てすぐに橋をわたって反対側

歩かないで船で来たので、三時間も歩い

に出る。三十分くらい歩くと初めての渡

てやってきたのがばからしくなる。今度

渉があった。モモまでもぐる深い流れで

くるときはコネをつけてこの船にのせて

あった。朝早いため水も冷たくこたえる。

もらったほうがよいと話しながら船にの

渡ってから半ズボンに変えた。その後モ

る。渡し船は七、八分ですべてしまふ。

モまでの渡渉を三回程した。河原にとき

無料であるがえらく船長(といっても船

どき水晶のかけらのような白い石があり、

の上にはわれわれ以外はその人しかいな

ひろったりして歩く。三森がときどきシ

い。)の態度が官僚的でそっけない。針

ひろの話をしする。僕のザックは相

の木側につくとザックをもった人が一人

当いかれていてシリコンをつけたほうが

まっていた。ここから二時間の道をのん

よいという。だんだん水も少なくなった

びりと奥黒部ヒュッテに向う。このころ

がひざ程度の渡渉が二十回位あったらう

った。ここで烏帽子へ行く三森と別れた。

にはもう雨もあがっていた。黒部川が黒

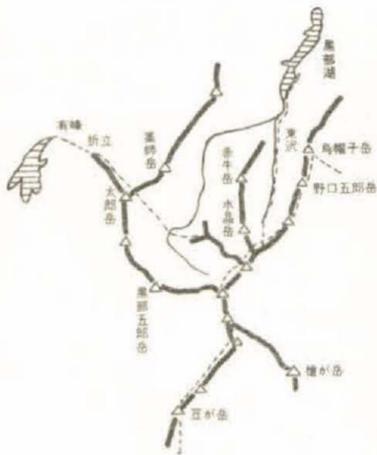
か。途中から水晶岳や東沢乗越がよくみ

えるようになった。比較的楽しい登り

へいく予定である。



黒部東沢



コース図

八月二十三日(月)

雲の平山荘——薬師沢——太郎小屋

(泊)

このコースが西銀屋というのを初めて

知った。山荘を出て一人で歩き始める。

富山に仕事の用事があるので有峰に出る

ことにした。そのために、東沢を三人で

登ったあと、一人一人ばらばらになって、

それぞれの道をとった。雲の平は夕べの

雨のせいもあってなんとなくしめっぽく

ぐしゃぐしゃした感じであり、お花畑の

美しさから連想されるような景色ではな

かった。太郎のほりがよっぽどスカッと

した感じである。薬師沢出合への下りが

ちょっといやであったが、それでもすが

すがしい気分はする。二、三のグループ

が登ってくるのにあった。途中六十歳く

らいの人が一人で登ってきた。三十歳を

すぎて少し山から遠ざかっていた自分が

反省され、東沢を気持よく登れたことで、

ある程度自信をつけたせいもありもう少し

し山登りに精を出そうかなと感じる。

薬師沢でちょっと休む。一人で歩いて

いる人が他に二人いて追いつ抜かれつし

ていたがここでまたいっしょになった。

太郎への登りも快適であった。初めは

登りとは思えないような道でちょっと尾

瀬を思い出させる。西銀屋という名もな

るほどとうなずけないこともない。上の

ほうからうしろをふり返ると雲の平が

ぽっかりとうかんでいて印象深い。小屋

には昼ごろについてしまった。午後は雨

がふつたが小屋の中いたので助かった。

薬師岳を一人で往復しにいった若い男が

ずぶぬれになって帰ってきた。薬師の小

屋では米一合を五十円で買ってくれるが

ここでは三十円なので上で売ってくれば

よかったとかいっていた。

八月二十四日(火)

太郎小屋——折立峠——有峰——富山

(高橋)

橋さんの「三年の初冬に不動岳から双六

まで快適に歩いたし、逆はたいした登り

もないから」などと云われ、やはり裏銀

座へ回ることにし、早々に出発した。

ガスで眺望もきかず、マメが痛く、節

烏帽子岳

八月二十二日

東沢乗越——烏帽子小屋

午前中の快晴が嘘だったように、稜線

に出る頃はいつの間にか曇天になり、そ

れが気分を重くさせた。それにしても最

後の一ピッチはしごかれた。「休みまし

ょう」と呼んでも聞えぬ風情で、ちょっ

と振りむいて先に行ってしまう高橋先輩

が憎たらしかった。——高橋さんの重い

荷物を担いでいるのに——

東沢を歩きながら、「今日はどこまで

行こうか」と三人で話していたが、私は、

白馬村の民宿に妻子を置いておくことも

あり、大町側に下るつもりではいた。高

橋さんの「三年の初冬に不動岳から双六

まで快適に歩いたし、逆はたいした登り

もないから」などと云われ、やはり裏銀

座へ回ることにし、早々に出発した。

ガスで眺望もきかず、マメが痛く、節

節の動きが鈍くなった身体ではあまり楽しめなかったが、まだこの位は歩けるんだという確認が湧き、トボトボ一人で歩く稜線もある種の快感があった。三ッ岳ではとうとう雨が降りだした。憶劫で仕方なかったがカッパを取り出した。汗が不愉快だったが漸くエボシ小屋にたどりついた。途中二人しか会わなかったという静かさが最大の取得だったろう。

小屋は結構人が多く、枕元で囲碁をやられたのには参った。白馬の民宿に電話をすると七倉まで迎えに来てくれるとのこと。

八月二十三日

烏帽子小屋——七倉

夜来の雨もすっかり上り、ブナタテを下って九時前に七倉に着いた。

三俣から笠ヶ岳

笠ヶ岳。それは僕にとっては長い間、「眺める」山であった。笠ヶ岳を初めて見たのは、山岳部一年の夏合宿である。涸沢に定着し、新鮮な感激に胸はずませながら歩き廻った穂高の岩尾根からの笠ヶ岳は、端正でどっしり落着いて見えた。二年の夏、初めての岩登りで緊張しながら登った滝谷の岩場から振りかえって見た笠ヶ岳は、穂高の持つ荒々しさ・雄々しさ比べて、あくまでもゆったりとした大らかさに溢れていた。その後、幾度となく北アルプスへ通ったが、ある時ははるか遠くに、ある時は近くに笠ヶ岳を眺め、その度に「いつかはあれに登ってやろう」と登高意欲をそそられた。しかし縦走路から外れている事、下山が不便な事から、登る機会が訪れず、相変らず「眺める」山であった。……そんな訳で長丁場を覚悟していた東沢が予定より

(三森)

早く抜けられそうに見通しが濃くなるにつれ、笠ヶ岳が急速に心の中で大きく広がっていった。東沢乗越で烏帽子に向う三森さんと別れ、さらに岩苔乗越で雲の平へ向う高橋信成さんと別れた。短い山行でも一諸に歩いてきた人と別れる時は、ちょっぴり感傷的になる。ガスの中に高橋さんが見えなくなってしまると、広大な無辺な大自然の中にポツンと取残されたような気持になり、心細さが増して来る。空は暗くたれ込め、近くの山もガスの中である。久らく休んだ後、疲れた足をひきずって鷲羽岳をやっとの思いで越え、五時近くに三俣山荘に着いた。最盛期を過ぎたとは言え、北アの中心部の小屋だけあってほぼ満員である。自分達だけの人間が泊っていて面白い。いかにも山馴れた、というよりも山小屋馴れたお兄さんや、物見遊山で都会の騒々しさをそのまま山に背負ってきた団体がいるかと思

りと、すみの方には皆を無視したような、予定は笠を越えて槍見温泉まで、コースより広くなかった。ガスの中にいくつもそれできて素適な山男から声をかけられるのを待っているような女の単独行者やら、様々な人間がいてそんな連中を見てみると結構退屈しのぎになる。全員が寝しずまるまでがまた大変である。三階の連中の話声がでかいと二階の連中が怒ると思えば、ポリタンの水をこぼす馬鹿がいて下の階の連中は、時ならぬ雨に飛び起きるし、いやはや賑やかな事である。でも良くしたもので、牢名主的な人間が皆を取り締め、ようやく静かになる。夜半から強い雨が小屋の屋根をたたき始めた。「明日は駄目かな」と案じながらも、いつの間にか眠りについた。翌朝、雨は上がったが、陰鬱な雲が垂れ込め、ガスがかかりほんの近くの山しか見えない。「こんな日に歩いたってしょうがない。湯俣へ下って温泉につかった方がいいよ」と言い怠け者の自分がささやく。しかし一度抜がった笠ヶ岳への夢が大きく双六池へ向った。一ピッチで双六へ。一応のりと雨が降り始めた。笠の頂上は思った

・タイム十四時間なので、途中で休んでいる暇がない。双六池もほとんど人影がなかった。双六から笠の稜線に入る。弓折岳までは起伏の少ないゆるやかな登りである。黙々とガスの中を歩く。弓折岳を越えて大ノマ乗越へ出る。道はここで新穂高温泉へでる道と抜戸への縦走路とに分れる。時間は九時半。時間的には笠へ向えそうである。天気も悪いながらもまだポツリポツリ来ていないので、勇躍、笠へ向った。抜戸までの道も、晴れていたらさぞかし良さそうな秩父平などがあり歩きやすい。抜戸への登りでちょっとアゴを出したが登り終えると、疲れも忘れた。面前にあらわれた抜戸から笠ヶ岳へ続く稜線のような優美な稜線は少ないだろう。這松の間に平たい岩を敷きつめた道が笠までずっと続いている。笠頂上直下の笠ヶ岳山荘で一休みした後、頂上に向った。頂上の手前で遂にポツリポツリと雨が降り始めた。笠の頂上は思った

より広くなかった。ガスの中にいくつもケルンが立ち並んでいる。あれほど憧れていた山頂なのに、あまり感慨がわかなかった。それより雨の方が心配だったのだろう。ザックも下さず、記念にと頂上の石を一つ拾って槍見温泉への道を下った。雨足が強くなり、ポンチを通して雨がしみ込み、たちまちずぶぬれになってしまった。なぜか知らないが、急に雷が恐くなり、自然にかけ足になってしまふ。単独行だと随分と臆病になるものだ。高度差二〇〇〇メートルの下りは相当なもので、結局四時間かかって、槍見温泉についたのは五時近かった。温泉の暖かいお湯にぬれた体を暖めながら、手足をのばした時、東沢から笠ヶ岳の充実した山行の満足感が胸一杯に拡がっていった。

(中村)

エベレストを

この眼で見る

吉沢 一郎

この原稿は「文芸春秋」に出したもののより一層私的になつてゐる。その意味で私はこれをわれわれの公報に送ることにした。

て遠くからでもその実際の姿を見たいものだからねがね思つていたことであつた。

それと同じようなことを私は前にも考えていたことがある。日本には生きてゐる氷河がない。山以外に取柄のない自分である。そして氷河という字を何度読み且つ書いてきたことであらう。だから一度はそれに触わり、その上で寝てもみたいものだと考えていた。

それが叶えられたのが一九六一年。山登りを始めてから三九年目であつた。場所はペルー・アンデス。仲間は一橋大学の山岳部員達。今度はインドとネパールへ行つて、海外旅行は一九六八年の地球一周を含めて三度目になるが、どれも山に關係のある用事？ばかりであつた。

三井物産の社長だつた水上達三君は私の学友である。その達三君が、「君ぐらい何んにも知らない呑気な男はないが、山だけは徹底して買ぬいたね。僕はその点で君はえらいと思うし、好きだよ」とニヤニヤしながら言つてくれたことがある。

私はこのようにして私の財産は友達と借金だけだなあと思つてつくづく思うことがある。山の友達は日本中に親疎合せて何百人もあり、海外にも、行け

ば必ず家中で歓待してくれる登山家が沢山いる。本当に「山はそして山の友達は有難き哉」である。

一方、私は生れて以来、人の世話にならなかつた。逆説的ではあるが、私の財産としての借金とはこのことを言う。勿論、本物の借金もいささかはあるが、両方ともいつまでも経つても返すことが出来ない。不甲斐なく、情ないと思ふこともしばしばあるが、返す努力だけはしてゐるつもりである。近くある出版社で私と

しては三番目の遺稿集を出してくれることになつてゐる。こんなのもささやかながら恩返しの一つにはなるかも知れない。

ところで今度のインド、ネパール行は、日本航空と三井航空サービスが次々と企画してゐるジャルパックの一つで、私は招かれてこれに参加した。ガイドとして傭われたのではないから、聞かれて答える以上のことは何もしなかつた。

二人のお客さんの中の異色の一人は宮崎神戸市長であつた。現職の大市長さんが二週間も職場を離れて遊びに行ったのだから、極端な賛否両論のあつたことは想像に難くない。そんな市長は死

んじまえ、というような投書もあつたという。

「エベレストをこの眼で見る」と言つたところで別に珍らしいことでも、特に自慢の出来ることでもあるまい。世界の最高峰といわれているエベレスト（ネパールではシャガルマータ、中共ではチョモロンマと呼んでいる）をその眼で見た人は、世の中に何百人いるかわからないし、中には自分の足でその頂上に立つた人さえおり（二七人）シェルバのゴンブなどはご丁寧に二度までそこに登つてゐる。

しかし私にとつては少なくとも初めての経験であり、年をとつてしまつた現在（六八才）ではい

でも宮崎さんは「私も人間なのだ。たまには息抜きを愉しんでどこが悪い。しかも正規の休暇をとって自前で行くのだ（文責在筆者）」とか何とか啖呵を切って来てしまった。出した人も出た人も両方ながら偉いと思う。

宮崎さんを含めて日本山岳会員が七、八名はいた。津田周二君は評議員である。女性では金沢の乾おばさんが変り種であった。この太っちょのおばちゃんが一番先に音をあげるだろうと思っていたのが一番元気だったのには驚いた。深田久弥君の遺愛の万年筆を、去年のエベレスト隊の成田君の追悼碑の傍らに埋めたのも彼女達であった。好きな山で急逝した深田君も、エベレストは近くで見なかったらうから、本当にいゝことをしてくれただと思っっている。

われわれが泊ったエベレスト・ビュー・ホテルは日大OBの宮原巍君が社長をしているのだが、このホテルはエベレスト街道を少し外れているクムジュン村の端れにある。最高峰との直線距離は三二キロ、丁度東京と横浜の距離である。湧雲で時々隠れるがスモッグがないので、一三五ミリのぐらいで富士山を覗くのと同様、とても迫力がある。

左からタボチエ、タウエチエ、ヌブツエ、エベレスト、ローツェ、ローツェシャル、アマイ・ダプラン、カン・タイガ、タムセルク、ピーク・43、などと半円以上に（一望半ぐらい）世界の高峰がズラリと並んでいるが、眼の前の山々は頂上から谷底まで逆落しに氷河をかけている。それから天下の絶景といっても過言ではあるまい。四〇万円ははたいても見に行く値打ちが充分にある。これは袖の下を貰っての宣伝ではなく、飽くまでも私個人の実感であるが、心掛けが悪くて天気にも恵まれず、肝心のエベレストが見えなくても、それは私の責任ではない。

ホテル自身は海拔三九〇〇メートルばかりのところであり、疎林に囲まれた平屋なので、私が想像していたほどあたりの風致を害してはいなかった（もっと基本的な問題は別）。設備が完成（九月頃）すれば可なりカンファタブルのものになる。部屋からもエベレストが見える。われわれはこのホテルに、金を払って公式に泊る最初のお客ということで、オープニング・セレモニーをやるという振れ込みであった。ところがやっこのことでご到着に及んでみると、材木はそこいら中に散らばっているし、玄関に登る階段も土の斜面が刻んであるだけ。又文字通りのオープニングで、ところどころ硝子が入っておらず、四〇〇〇メートルの冷たい風が食事中にも遠慮なく吹き込み、ロビー兼ダイニング・ルームの中で焚火を囲むという珍風景も見られた。あてにしていた暖房もなく、トイレには水が出ない。寝る時はシュラフ・ザックの中でふるえていた。しかし四カ月後にはこれらが笑い話になるようにと、宮崎君は日本の大工さん二人を含む大勢の即製アルバイト（シェルバ族）を大童で督励していたから、この秋には宣伝通り豪華なホテルになっていたよう。

ただ問題は富士山より一〇〇メートルも高いその高度と、カトマンズからの飛行機が天候その他の事情でなかなか予定通りに飛ばないことなど。その意味からはポスト・モンズンの方がよいが、こりしたことを考慮に入れて計画を組めば、きっと楽しい稔り多い旅行になるし、それにネパールの首都カトマンズは海拔約一四〇〇メートル、気候も快的だし、見るところも沢山あるので、四日や五日滞在していても決してあきることはない。

○コーチャイ会

昭和46年7月19日(月)

場所 如水会館

出席 三森、中村雅、岡田健、俵、金子、(大学生) 井草他数名

議題 山岳部夏山合宿計画について。七月十四日~八月九日、穂高定着四日間

の後、剣岳まで縦走、の計画を了承。

○会報発行打合せ

昭和46年7月21日(水) 正午~一時

場所 有楽町レバンテ

出席 村尾、高橋信、岡田健、大賀

内容 29、30、31号発行の打合せ

○夏山懇親山行

昭和46年8月20日(金)~24日(火)

場所 黒部東沢より北ア中央部

参加者 三森、高橋信、中村雅(詳細別報)

昭和46年9月3日(金) 午後六時半

場所 如水会館会議室

出席 (評議員) 望月達、岩崎、吉沢一、久保、

山田亮、伊藤恙、松下、大、高崎俊、(幹事) 中川君追悼号) 十一~十二月と、急ピッチで刊行の

議題

(1) 山岳部部室修復の件

老朽状況を大賀幹事より写真にて説明、加藤幹事より総建て直し約九〇万円、屋根修理約二〇万円の見積り説明あり、種々検討の結果、望月会長に一任、学校当局との関係等につき、勝田部長にもご相談頂くこととした。

もご相談頂くこととした。

(2) 懇親山行の件

久保評議員より、夏山企画・実行の不手際を強くお叱り頂く。当面、橋本君の追悼登山は、学生が八月末に実施してしまつたため見合せ、九月二十四日~六日、岳沢で秋の懇親山行を行なうことにした。十一月に、雁ヶ原摺山ハイキングを計画。

中。計画中。

計画中。

(3) 会報発行状況

六月末発行予定の二十九号は、印刷の手違い等

から発行が遅れたが、九月三日~十日の間に発送完了。三十号からは印刷所を変えるので作業のスムーズ化が期待でき、三十号十月初、三十一号(平

川君追悼号) 十一~十二月と、急ピッチで刊行の

予定。

(4) 橋本君追悼文集の件

一橋山岳部発行の追悼文集八十五部を針葉樹会で買取り、救援作業参加者、遭難対策基金カンパ

拠出者を中心に発送した。残部僅少なからあり、ご入用の向きは中橋寿雄(昭三九年卒、キリンピ

ル勤務) 幹事まで。

へ消息

○石 弘光氏 46年8月 ミシガン大学に留学。家族同伴 三年間の予定。

○岡垣治雄氏 46年8月 横浜支店貸付課長に栄転 Tel〇四五一六五一一八八一

○吉沢一郎氏 渋谷に社屋移転 Tel四〇七六二二

○石原 修氏 富士電機製造(株)吹上工場に転勤勤務先 埼玉県北足立郡吹上町南一丁目五番

富士電機製造(株)吹上工場 総務課長

自宅 浦和市元町二一十五一十五 Tel〇四八八八一八六一二一一〇

「表紙写真説明」

チンネ左稜線

一九六六年八月撮影。この年の夏山合宿は剣沢と三ノ窓雪溪の
出合、二股に定着し、
剣岳周辺を歩きまわった。登山ブームはチンネの岩に無数のハーケンの傷をつけ、ゲレンデ化してしまっただけ。我々が登ったチンネは、ホールドが手の油でツルツルしており幻滅感を味わったものである。それでも、八峰から見る左稜線のスカイラインはいつ見てもスカッとしている。

(撮影 岡田)

遭難対策基金

カンパ集約状況

(1) 全般(46年8月31日現在)

申込 七六名 四四九、六〇〇円
入金 五三名 三六五、六〇〇円

(2) 会報29号発表以後の申込及入金分(46年5月11日～8月31日) * 印未入金、

敬称略
中川 孫一 五千円
江面 誠二 五千円
大建 二郎 三千円*

三井 博 三千円*
宮本 英治 三千円*
朝木 大統 三千円*
遠藤 晶士 三千円*

(3) お願

目標の五〇万円にあと一歩です。とくに、昭和二十年代の会員の方は、非常に応募率が低いので、何卒よろしくご協力願います。

会計幹事 石田 信隆

原稿募集

次刊「復刊三十一号」は、一九七一年山行特集とします。発行予定は年末から年始にかけてです。で編集人宛次の要領で原稿をお送り下さい。

- (1) 山行表
(イ) 場所 (ロ) 時 (ハ) 同行者名
- (2) 山行文

締切日 一九七一年一月末日

編集後記

針葉樹復刊第30号をお届けします。スタイルを若干変えましたが如何でしょうか。

× × ×

今回より高橋信成氏が編集人に加わりました。会報の発刊に当り、出来るだけ多くの会員諸兄の参加が得られるよう今後も努力を続けたいと思います。

× × ×

次回第31号は、1971年1年間の山行記録特集したいと思います。11月末まで編集人に、①コース②山行月日、③同行者名、④簡単な印象等を知らせて下さい。(岡田)

会費納入のお願い

九月初めからハガキで皆様にお願ひしました処、早速十数名の方から入金頂き、心からお礼申し上げます。なおかつ、今年度分の納入率は二割そこそこでありまして、幹事としましては会の運営に大きな不安を持っております。諸事多用の時節柄、ご迷惑とは存じますが、何卒よろしくお願ひ申し上げます。額は卒業十一年超三千円、年々十年二千五百円、年末で二千円です。送り先は、

現金書留 渋谷区千駄ヶ谷一ノ四ノ八下150三菱銀行千駄ヶ谷寮 石田信隆
銀行振込 三菱銀行本店サービスコーナー 針葉樹会普通預金口座番号 四〇一七五二九

会計幹事 長沢 道彦

針葉樹会報 復刊30号

発行日 1971年10月15日
発行所 針葉樹会 代表 望月達夫
印刷所 一九堂印刷所

